

高岡の図書館

第99号

2015. 1. 4

編集・発行 高岡市立中央図書館 (〒933-0023 富山県高岡市末広町1-7) TEL 0766 (20) 1818 FAX 0766 (20) 1819

現代のメディアとこれからの図書館

富山県生涯学習カレッジ高岡地区センター所長

富山県立志貴野高等学校 校長 前田 一郎

志貴野高等学校に勤務するようになって2年になろうとしている。この2年間で、高岡駅周辺は大きく変わった。昨年3月には高岡駅ビルが竣工し、かなり便利になった。また、まもなく北陸新幹線が開通し、東京へは時間的に大変近くなる。同様にメディアの世界も活字が中心だった頃から様々なメディアが利用できる世界に変わりつつある。また、印刷物も写真や図版は本当にきれいで、テレビで見る映像や音楽も前と比較にならないくらい美しくクリアになっている。

さて、高校生の時、進学先を選ぶときに影響を受けた本の中で、湯川秀樹の「旅人」がある。高校生にとっては、著名な物理学者の名前が随所に出て、専門用語もあり読みやすい文体であるが内容は難しかった。また、今となっては古い本であるが、寺田寅彦の随筆集も物理学者から見た世相が読みやすい文章で記述されていて世間知らずの高校生にとってはかなり興味を持って読めたような気がする。さらに趣味として楽器演奏もやっていたので、小澤征爾の「ボクの音楽武者修行」にも影響を受けた。文庫本は教職に就いてから出たので、おそらく分厚い本で読んだはずであるが、今から考えるとバイクに乗り、武者修行をしている小澤征爾に自分を重ねていたのかもしれない。旅行記としても非常に楽しい本である。このように受験勉強の合間にはいろいろ本を読んでいたような気がする。ところで、小澤征爾は80歳近くになってもすばらしい演奏を聴かせてくれる。今年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本でのベルリオーズの「幻想交響曲」は緻密で迫力のある演奏（BS放送で視聴）であった。

学生の際は応用物理学を専攻していたが、数学

の教員として勤めたため、専門についてはあまり触れる機会もなく過ぎてきた。しかし、様々な番組を録画で見えるようになってからは、科学番組や歴史番組を録画で見ることが多くなった。ところで、科学番組の中でBS放送で3年前から放送されている「コズミックフロント」を紹介したい。宇宙だけでなく、近年新たに発見されたことや観測されたことなど最新の科学の様々な分野についてCGを交えてわかりやすく紹介してくれる。特に、宇宙旅行やハッブル望遠鏡などの写真を図鑑では紹介されていないものまで、動画・静止画など多彩な映像が出てくる。著作権の問題があると思うが、図書館にもこのようなすばらしい番組の録画（ビデオ）もぜひ備えてほしいものである。

マンガで大学初年レベルの科学（量子力学など）を解説する本もよく見かける。また、最新の物理学や天文学を難しい数式無しで分かりやすく解説する本も多く発刊されている。様々なことに興味を持つ中学生や高校生の世代にどんどん新しくなる科学の世界や新しい発見が続く歴史など様々な分野に目を向けるきっかけを与えられる。

昔は図書館でLPレコードを借りたこともあるが、現在はDVDなどを貸し出している。さらに、マンガもある国では文化の1つとして数えられていて、文芸と同様の位置を占めているようである。しかし、映像による学習は確かに分かりやすいし、電子書籍も普及しつつあるが、自分だけかもしれないが映像やパソコン画面はきちんとした記憶として残らないので、活字による本や図鑑は必ず残っていくと思う。さらに、図書館は様々な世代が様々なメディアを利用して、自ら知識を得る生涯学習の場となっていくと思う。

題字は「高岡御車山等由緒」による

山町筋の天神様・ひなまつりについて

土蔵造りのある山町筋まちづくり協議会 事務局長 志甫 和彦

伝統的建造物保存地区の選定

「山町」という呼び方は、5月1日に巡行する御車山を有する10か町を称することにご承知のことと思います。旧北陸道の一部を俗に山町筋と呼んでいます。御馬出町、守山町、木舟町、小馬出町で、高岡の開町以来の町割りを残している歴史的にも貴重な地域です。

たまたま、御馬出町から小馬出町の直線コース約600メートルは明治期に入り、各家が前面1間半ずつを市に提供し道幅が広くなったり、昭和に入って町を二分するように昭和通りが作られたりしたため、開町時とはすこし異なってきました。この地域には、明治33年（1900）の大火以降に建てられた耐火建造物としての土蔵造りの家が多く残っており、土蔵以外の古い建物も含めこの一帯が平成12年（2000）12月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。高岡の歴史を残すもともと高岡らしい町並みだと申せましょう。平成4年に高岡市の肝いりで「土蔵造りのある山町筋まちづくり協議会」を結成し、その後、住民の合意を得て選定されるまで8年間の歳月を必要としました。

土蔵造りフェスタの開催

現在行っている「山町筋の天神様祭り」「ひなまつり」は、伝建地区に選定されたことを契機として始めた行事です。

平成9年に木舟町が単独で始めた「山町筋土蔵フェスタ」は、平成11年には商工会議所の後押しで当時の通産省の商業振興資金を得て、初めて山町筋4町が結束して「土蔵造りフェスタ」を開催し、この4町合同スタイルが「土蔵造りのある山町筋まちづくり協議会」のイベントとして現在まで続いています。

歴史的には大正期までは、高岡の政治、商

工業の中心地であった山町は、本来は問屋の町として発展していた地域ですが、戦後の経済環境の変化や、車社会に対応して駅南に新しく問屋センターが造成されると、殆どの問屋が移転して、やや寂れた商人町となってきました。

このような環境のもとで、「土蔵造りフェスタ」などのイベントによりまちづくりを進める一方で、さらに復元・修復されている土蔵造りの町並みの美しさを出来るだけ多くの市民に知ってもらおうと企画したのが「山町筋のひなまつり」です。

ひなまつりの開催

この山町筋には、江戸期や明治時代から続く商家も多く、そこで所蔵されている雛人形を中心に古い町並みで文化を見ていただくというわけです。資金もなく、手作りのささやかなイベントとして平成13年から始めました（2月又は3月に開催）が、幸い報道機関の協力もあり、県内各地から見物客が訪れ、予想しない賑わいを見せました。

天神様祭の開催

これだけ市民の方々に喜んでいただけるのなら、古い町の文化の紹介として天神様も見えていただくという話になりました。県内では高岡を中心に独自の天神様崇拝の風習がありますし、正月の当たり前の行事のため、どちらかというと一般大衆にはマイナーな感じが防げず、うまくアピールできるかどうか心配な面もありました。たまたま、平成14年は菅原道真公没後1100年記念の年にあたり、北野天満宮では菅原道真ゆかりの国宝や重要文化財の展示、大阪府立図書館では道真の伝記資料展を開催するなどのイベントを予定し、

パンフレットやチラシが多く出廻っていたことが、山町での天神祭開催のタイムリーでよい後押しになりました。

とりあえず1回だけはやってみようと踏み切り、1月中旬に開催したわけです。ただ、どうせ開催するなら様々な天神様を集めた方が面白いだろうと、新聞で天神様の募集を行い、県内各地からの申し出によりお借りして展示もさせていただきました。

時代や、画家の趣向により菅公への様々な心情の推測が絵画として表現されており、非常に興味深いものを拝見することができました。本来の憤怒の表情を見せた怒髪天神様、霊が唐へ渡ったという渡唐天神、稚児天神などは、現在の学問の神として崇められているものとは異なった深い関心を持たせてくれました。素材的にはあまり見たことのない石彫の天神様など珍しいものもありましたが、ただ数人の実行委員のみの運営では人出が不足し、以降は市内でお借り出来るもののみに限りました。また同時に開催している天神様ゆかりの講演会についても、様々な研究を重ねられている方々の協力により、興味深い話題を提供していただいております、参加した一般の市民の方々より強い支持を得ているようです。

私の家では、座敷の床の間に先祖から伝わる天神堂（内部には木彫彩色の天神様が鎮座されている）を飾り、両脇には隨身（右大臣・左大臣）を配置し、堀川敬周の描いた天神像の掛け軸を掛けその前にお鏡などの正月飾りを置くことが新年を迎える準備となっています。高岡で初めての町絵師と言われる堀川敬周



堀川敬周筆「天神座像」(部分)

(1789 頃～1858) とは、先祖が同じ寺の門徒としてのお付き合いがあったのではないかと推測しています。別室には、長男誕生の折に家内の実家よりいただいた「太宰府の天神像」も掛けています。

男子が生まれたら天神様の掛け軸や、木彫像を用意する地域だけに関心も強いことが伺われ、現在まで 13 年間継続しています。寺子屋が多かったであろう当時を想像して、地元の平米小学校の協力を得て寺子屋的な「天神講」も開催し、好評を得ています。児童数 15～20 名程度、父兄を含む一般の方 15 名ほどの定員ですが、歴史や学問に対する学童の興味を引き出す契機になればと考えています。

平成 27 年の天神様祭は、1 月 24 日（土）、25 日（日）に開催し、同時に小馬出町の土蔵造りのまち資料館での講演会も行いう予定です。

「土蔵造りのある山町筋」は、かつての商人町です。「まちづくり協議会」も「由緒ある町の伝統を保持しつつ、快適な生活環境と活気を育む特色ある商業環境をつくりだす」ことを目的とし、そのアプローチとして様々な試みを行っていることをご理解いただきたいと思います。そして、高岡市民にとっては、ゆったりくつろげる癒しの町並みを保存している商人町となることを願っています。



志甫家の床の間の天神飾り

||||| 調査相談の窓口から |||||

…… おたずねくださいQ&A (中央図書館) ……

図書館は、文献や図書・古い新聞などを提供し、皆様が「知りたいこと・調べたいこと」を、探し出す所です。私たちは、そのお手伝いをしますので、お気軽にお尋ねください。
今回は、郷土と冬ゆかりの質問を取り上げます。

レファレンスの例

Q：昭和15年の大雪について知りたい。

A：「高岡市史 下巻」によると、昭和15年(1940)、雪は1月23日から2週間とぎれることなく降り続き、1.83mという伏木測候所開設〔明治16年(1883)、伏木灯台番舎内に設置〕以来の降雪記録であったこと、日曹高岡工場や工場・寺院・住宅などに多数の被害を出したこと、加えて天保12年(1841)以来、100年目の大雪だったとわかる。そのほか、当時発行の『富山日報』『北陸日々新聞』などを調べると、伏木～氷見間の列車は不通となったと記され、「いつ晴れるやら見当つかぬ—1坪当たり100貫の重量、各戸においても雪おろしを励行されたい」などと注意を喚起する程であった。

Q：いとこ煮とは、何か知りたい。

A：「日本の食生活全集 16—聞き書 富山の食事」「うちのお寺は浄土真宗(わが家の宗教を知るシリーズ)」「万華鏡53(富山写真語)」などを調べると、こんにゃく・大根・人参・油揚げなどの具を煮た中に、下煮しておいた小豆を煮汁とも入れて更に煮込んだものであるが、煮込む野菜(他にごぼう・蕪など)と味付け(味噌・醤油・塩など)は、富山県内でも地域によって異なるとある。

似たような野菜をいっしょに入れて煮るので、(いとこのような関係だと)いとこ煮という(他の説もある)。

親鸞上人の命日に寺に集まり、僧侶による法会の講話を聞き、昼食にふるまわれる料理として始まったが、門徒の各家庭でも作られる。

Q：昔、高岡にあった日清紡績という会社の設立の時期などを知りたい。

A：「たかおか歴史との出会い」「富山大百科事典」などを調べ、さらにその背景を知りたく「千保川の記憶」を確認し、以下のことを知ることができた。

明治26年(1893)に高岡の千保川右岸の横田村地内に、日本海側初の紡績会社、当時は少なかった地元資本のみによる近代的工場、高岡紡績株式会社として設立された。しかし、操業間もない時の千保川の洪水により運営不振に陥り、電灯供給事業を加え、社名を高岡紡績電灯株式会社と改称した。明治33年の高岡市内の大火や、紡績会社自体の解散の危機もあったが、紡績業界の好況により再建した。しかし、再び業績不振となり、大正4年(1915)、日清紡績株式会社として再出発。昭和34年(1959)の閉鎖まで、営業が続けられた。

Q：東 外枝について知りたい。

A：「高岡を愛した先人たち」「ありて」(平成24年3月号)「創立50周年記念誌」(社会福祉法人 富山県呉西愛育会・高岡愛育園)「定塚小学校百年史」などによると東 外枝(あずま・とし・1889～1976)は、高岡横田町の長楽寺隣地に生まれた。看護師として働いた後、結婚により病院長夫人となっただけで、病院を支える一方、地域の婦人活動に尽力。太平洋戦争下の、愛国の婦人会の地方リーダーの一人として活躍。戦後は、戦災孤児の救済運動に力を尽くし、富山県立「高岡愛育園」の建設〔昭和28年(1953)〕のため、募金や土地探しに奔走し、初代園長に就任。在職23年間、児童処遇の向上と施設の近代化のため私財をも投入した。園児らからも慕われた。

(野口充子 記)

さしえ 「挿絵って おもしろい！」

佐竹美保氏の講演と「原画展示」を開催して

【2014 年秋】

去る 11 月 1 日（土）、高岡市生涯学習センター 4 階ホールにおいて高岡市出身の人気挿絵家佐竹美保さんをお招きして、講演会と原画の展示を開催した。この事業は主催は高岡地区図書館連絡会（氷見市・射水市・高岡市の図書館で構成）、共催が富山県図書館協会の富山県図書館協会ナビゲーション事業として行ったもので、当日は佐竹さんのファン 120 名余りが、午後 1 時 30 分から約 2 時間、佐竹さんのお話と絵に魅了された。

この催しは 3 部構成で、最初は佐竹さんが表紙と挿絵を担当された児童書「海辺の宝もの」（ヘレン・ブッシュ著 鳥見真生訳 あすなろ書房発行）を例に、挿絵の仕事を受けてから本が出来上がるまでについて講演された。「海辺の宝もの」に描かれた挿絵を大型スクリーンに映し出しながらの解説は、参加者の皆さんに強い印象を与えたのではないだろうか。

講演の次は佐竹さんへの質問コーナーで、トークショー形式で参加者の皆さんから事前にいただいていた質問にお答えいただいた。普段はどんな本を読まれているのかといった日常なことから、挿絵を描くときの心がけや作品への思いなど佐竹さんの作品をかなり熟知していると思われる内容の質問もあった。佐竹さんは挿絵の仕事が多く、絵本を手がけることは少ないとのことだったが、当日は絵本「ゆきおんな」（中脇初枝文 小学館発行）の原画を持って来ておられたことから絵本「ゆきおんな」が話題になり、絵本に描かれた吹き荒ぶ雪の様子はふるさとの雪をイメージしたものと話された。

最後は挿絵の原画を見ながら佐竹さんから解説をお聞きするというもので、私たち主催者は当初は原画は額に入れて展示するつもり

であった。しかし、佐竹さんの強いご要望もあり、本（完成品）ではわからない生の絵から伝わってくるものの力に心を動かされ、額に入れた状態で絵を鑑賞するのではなく、テーブルの上に原画を一枚一枚置き参加者からの問いかけに答えながら佐竹さんが作品の解説をするという方法をとった。進行など至らない点多々あり、参加者の皆様にはご不満もあったと思うが、佐竹さんから直に解説を聞きながら絵も堪能できたのではないだろうか。

【2004 年春】

佐竹さんには 10 年前、高岡市立中央図書館がウイング・ウイング高岡内に移転した平成 16 年にもお越しいただいた。オープニング記念事業の一環として 5 月 1 日から 31 日までの 1 か月間「原画展」を開催し、期間中の 5 月 8 日には佐竹さんを囲んでの交流会も行った。

佐竹さんに原画展をご依頼したのは、佐竹さんが母校の下関小学校に図書を寄贈されているという情報を得たのがきっかけだった。東京でのご活躍のなか、母校のことを忘れずにおられる方なら、きっと良いお返事をいただけるものとの思いからだった。

（佐藤里美 記）



佐竹先生による原画の解説（2014 年）

「^き木^{ふね}舟^{じょう}城^{あと}跡」

【福岡地区】

平成 17 年（2005）11 月に高岡市と合併し 9 年余を経過した福岡地区。高岡市の西端に位置し、東南にかけては高岡市戸出地区、砺波市に接し、北東は氷見市、北西は石川県押水町、西から南にかけては小矢部市にそれぞれ接している。高岡市との合併前、西砺波郡福岡町としての時代も、昭和 29 年（1954）9 月に現在の福岡地区全体がひとつの町となるまでは、福岡町、山王村、大滝村、西五位村、五位山村、赤丸村で幾度かにわたる合併の歴史があった。

【木舟城跡、現在の姿】

木舟城跡は、昭和 40 年（1965）10 月 1 日に指定を受けた富山県指定史跡である。小矢部市との境界付近、かつての大滝村にあった高岡市福岡町木舟に位置し、のどかな田園地帯の中に小丘が残る小さな公園として親しまれている。

【築城、そして戦国の動乱】

越中国の石黒太郎光弘は、寿永 2 年（1183）、木曾義仲に従い倶利伽羅峠の戦いにおいて活躍した豪族である。石黒庄があった砺波郡南部（現在の南砺市福光地区）を本拠地としていた石黒氏は、源氏方について勢力を広げた。平安時代末期の寿永 3 年（1184）、石黒太郎光弘が木舟の地に城を築いて居城とし、木舟石黒氏になったと伝えられている。山全体をなわばりとして城を築く山城が多く見られた当時には珍しい平城で、3 つの郭で構成され、その周りを堀が取り囲むものであったとみられている。

本流福光石黒氏が文明 13 年（1481）山田川における一向一揆との戦いで滅亡してからは、木舟石黒氏が主流となり、戦国時代まで北砺波を広く支配した。しかし、戦国時代、名だたる武将が攻防を繰り返す中、木舟城も歴史の奔流に押し流されていく。上杉氏の配下に入っていた石黒氏であったが、上杉謙信の急死後は織田側へつき、信長はその将佐々成政

に越中を領有させた。織田・上杉の攻防が一進一退を続ける中、天正 9 年（1581）謙信死後の越後を平定した上杉景勝が越中に入り木舟を占領。木舟城を追われることとなった石黒氏最後の城主石黒成綱が信長を頼って逃亡するも信長の命を受けた丹羽長秀勢により近江長浜で討たれ、ここに木舟石黒氏は滅亡した。同年中に再び越中を平定した成政であったが、同 10 年信長死後、羽柴秀吉と反目して秀吉の将前田利家と抗争することとなる。同 13 年 8 月、秀吉の北陸征伐により成政は降伏。成政降伏後の木舟城には前田利家の弟秀継が今石動城より移り、利家の息子利長には砺波・射水・婦負の 3 つの郡が与えられ、現在の高岡市に建つ守山城に入った。こうして越中における戦国の動乱は終焉を迎えたのである。

【地震の悲劇、そして平成の世へ】

戦の炎が収まった矢先、新たな悲劇が木舟城を襲う。天正 13 年（1585）11 月、天正大地震の発生によって城が倒壊、当時の城主であった前田秀継とその妻、そして多くの家臣たちが圧死したのである。この地震は城下にも同じく壊滅的な打撃を与えたと伝えられる。秀継亡き後は、その子・利秀が木舟城に入り、同 14 年 5 月には京へ向かう上杉景勝一行を出迎えるほどに城の修復を進めていた。しかし、その後、復興を断念、今石動へ居城を移し、木舟城は廃城となった。城下町は次第にさびれ、城下の民も四散したが、慶長 14 年（1609）高岡城築城の際に移住したものが集まって木舟町を形成。現在も高岡市にはその名が残っている。

また、平成に入り、能越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、当時の生活の様子を示す埋蔵品が数多く出土している。

《参考資料》

『福岡町史』、『貴船城古今誌』、『戦国の終焉』、『メディアが伝える城下物語』 ほか

（江尻紀子 記）

高岡ミニ人物史

私塾「^{こんほうどう}混放洞」を開いた漢学者

かわ い へい そう
河 合 平 三
(1830 ~ 1878)



中田地域の南東に位置する下山田地区。自然豊かな地区内を流れる和田川の河岸段丘に、かつて幕末から明治初期まで「混放洞」という私塾として使われた建物がある。

混放洞を開いた河合平三は、幕末から明治への教育推進に貢献した教育者である。天保元年（1830）6月、砺波郡下山田村（高岡市下山田）河合伝右衛門の三男として生まれる。幼名は儀正^{ぎしょう}であるが、後に平三と改めた。号は神城。

幼少の頃から神童といわれるほど学問に優れ、7歳の時富山藩士近藤士専（儒学者）から漢学の素読^{なりやす}を受ける。9歳の時、加賀藩13代藩主前田斉泰の前で漢書の素読を行い、非凡な才能を称賛され、床飾の「獅子頭石」を拝領した。これは現在も家宝として秘蔵されている。弘化3年（1846）16歳の時、金沢藩士鶴見小十郎に師事する。さらに嘉永3年（1850）京都に上り梅ヶ辻春樵の門に入り、学問を修めた。

郷里に戻った平三は安政2年（1855）分家して一家をおこし、農耕の傍ら漢学塾「混放洞」を開く。「混放」には中国語で「身分の異なるものを集め世に紹介する」という意味があり、「洞」には「奥まった場所」という意味があることから、「混放洞」は「身分にかかわらず人を集め、世に出す奥まった場所」という意味を持つことがわかる。河合家土蔵の戸前と呼ばれる空間の二階の一室を学舎とし、小さな明り窓しかない部屋で少年たちは勉学に励んだ。平三の学徳は高く、「四隣に響く」といわれるほどで砺波や射水地域など遠方からの入門者が後を絶たなかった。残存資料も豊富であり、混放洞で使われていたと思われる書物の中には歴史書・地理書はもち

ろん医学書や薬学書、算学や仏教に関する書物までであるという。

主な塾生には中田地区（高岡市島新）出身の政治家・島田孝之をはじめ、島巖（県立農学校創立者）、高島孫次郎（射水郡水戸田医師）、安念次左衛門（中越銀行取締役）などがあり、地方や全国で活躍する人材を数多く輩出した。また、近隣の僧侶や神官らも多く学んでいた。

明治2年（1869）杉木教学所が開設されると平三は教師として迎えられ、教員と戸長役を勤めた。翌年2月27日金沢郡治局直支配を仰せつかり、明治5年（1872）の学制発布に伴い、翌年より中田・頼成・東保新各小学校創立係を命ぜられた。明治11年（1878）11月2日、伝染病のため48歳で逝去した。

混放洞は明治時代に入って間もなく閉鎖され、河合家の蔵として使われてきたが、老朽化が進んだため、現当主が改修を決意。平成22年（2010）7月に着工し、約1年半かけて改修工事が行われた。富山県内では500以上の私塾や寺子屋が存在していたが、寺子屋の遺構が残っているのは混放洞だけである。

平三の地元である中田地区では、学習会や講演会を通じて平三と混放洞について学び、知ろうとする動きが広まっている。また、地元婦人会が平三と混放洞を題材にした紙芝居を制作したり、平成21年の中田かかし祭では住民の手により平三が前田斉泰の前で漢書を素読する場面を再現したかかしが制作されたりするなど、地域全体で郷土の偉人と歴史遺産を伝え残す取り組みが行われている。

《参考資料》

『第2回下山田いきがいサロン資料』

『下山田村誌』『中田町誌』

『北日本新聞』『富山新聞』ほか

（藤澤陽子 記）

お知らせ

図書館マナーアップキャンペーンを実施しました

平成 26 年 9 月 8 日（月）から 30 日（火）に中央図書館で富山県図書館協会主催の図書館マナーアップキャンペーンを実施しました。期間中、富山県立富山北部高等学校デザイン科が制作したマナーアップキャンペーングッズと中央図書館所蔵の汚破損のある資料を展示して、図書館利用のマナーアップを呼びかけました。また、9 月 27 日（土）には、富山北部高校生がマナーアップ啓発読み聞かせ活動を行いました。



富山北部高等学校デザイン科制作
マナーアップキャンペーングッズ

図書館まつり



図書のリサイクル市(グルーブルーム)

10 月 25 日（土）、ウイング・ウイング祭の一環として、中央図書館恒例の図書館まつりを開催しました。「図書のリサイクル市」では、利用者からの寄贈本や保管切れの雑誌など約 2000 冊を用意し、来館者に一人 3 冊まで無料配布しました。

「おりがみでピカチュウをつくろう！」コーナーでの折り紙製作、人形劇団どんぐりコロコロの皆さんによる「人形劇」、「古文書修復実演」などの行事を開催し、多くの家族連れなどで賑わいました。また、3 階カウンター前で「高岡の由緒町人 天野屋伝兵衛」をテーマに関連する資料の展示をしました。

—— 特別整理休館（蔵書点検休館）のお知らせ ——

蔵書点検作業のため、高岡市立図書館 5 館が順次休館します。ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いいたします。（休館中の図書の返却は、ブックポストをご利用ください。）

伏木図書館 1 月 21 日(水)～1 月 28 日(水) 福岡図書館 2 月 12 日(木)～2 月 19 日(木)
戸出図書館 1 月 29 日(木)～2 月 4 日(水) 中央図書館 2 月 23 日(月)～3 月 2 日(月)
中田図書館 2 月 5 日(木)～2 月 11 日(水・祝)

伏木・戸出・中田・福岡図書館利用案内

1 月							2 月							3 月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				①	②	③	1	②	③	4	5	6	7	1	②	③	4	5	6	7
4	⑤	⑥	7	8	9	10	8	⑨	⑩	⑪	⑫	13	14	8	⑨	⑩	11	12	13	14
11	⑫	⑬	⑭	15	16	17	⑮	16	⑰	18	19	20	21	⑮	16	⑰	18	19	20	⑳
⑱	19	⑳	㉑	22	23	24	22	㉓	㉔	㉕	26	27	28	22	㉓	㉔	25	26	27	28
25	㉖	㉗	28	29	30	31								29	㉟	㊱				

○印は伏木・戸出・中田図書館の休館日

□印は福岡図書館の休館日

※ 中央図書館は毎月第 4 月曜日のみ休館します。（年末年始 12 月 29 日～1 月 3 日 休館）

高岡市立中央図書館	〒933-0023 末広町 1-7	TEL (0766) 20-1818	FAX (0766) 20-1819
高岡市立伏木図書館	〒933-0106 伏木本町 1-21	TEL (0766) 44-0073	FAX (0766) 44-0048
高岡市立戸出図書館	〒939-1104 戸出町 3-19-29	TEL (0766) 63-1254	FAX (0766) 63-1254
高岡市立中田図書館	〒939-1272 下麻生 1108	TEL (0766) 36-0054	FAX (0766) 36-0054
高岡市立福岡図書館	〒939-0132 福岡町大滝 44	TEL (0766) 64-1034	FAX (0766) 64-1038